

共生

奈良県生協連

2018年 4月

NO.108



ピースかふえ



第28回奈良県生協大会



もくじ

第28回奈良県生協大会	1・2
2018年度取り組むこと	3
2017年度役職員研修会	4
おじゃましました～コープ自然派奈良の巻～	5
ピースかふえ	6

フードバンク奈良設立セミナー	7
環境のページ	8
3.11を忘れない	9
近畿農政局と近畿地区生協府県連協議会との意見交換会	10
公告「第29期通常総会」	11

第28回 奈良県生協大会を開催しました

子どもたちの未来と共生社会を考える

～つながりと居場所をもとめて～



2月17日、奈良ロイヤルホテルにて、
第28回奈良県生協大会を開催しました。
昨年に引き続き「子どもたちの未来と共生社会を考える」
をテーマに、3人の方の講演・報告を聴きました。



森宏之会長



佐藤啓議員



榊田齊志部長

開催にあたっては奈良県、奈良市、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、奈良県社会福祉協議会の後援とご協力をいただき、当日は生協組員・役職員の他、行政やNPO、諸団体からの参加があり会場にはあわせて約100人が、つながりと居場所のある地域社会づくりについて学び考えました。

森宏之県連会長あいさつの後、ご臨席された佐藤啓参議院議員が、全ての子どもたちに等しく希望とチャンスがある社会づくりの意義について述べられました。また榊田齊志奈良県くらし創造部長からもごあいさつをいただき、安全で安心な暮らしとまちづくりを目指す生協の活動への期待の言葉を頂戴しました。

講演①

「子どもの貧困に地域でできること ～山科醍醐こどものひろばの実践を通して～」

講師：村井 琢哉 氏 (NPO法人山科醍醐こどものひろば理事長)

自らの団体で実践されている子どもや家庭を支援する活動から、子どもたちが直面する困難とその要因について詳しく説明されました。「貧困とはあくまで経済の問題であり、これに向き合うことが大切、貧困は文化的機会や人間関係を奪い、生きにくさを増幅させていく」「データの数字をみれば改善しているかに見えるが、個々の子どものケースからみると、何も変わらずむしろ状況は悪化する一方」と指摘、「困っていることは他人に見せないから周りから見えづらい。それぞれの子どもたちが未来に向かって『今』を丁寧に生きなおすことができる環境をつくっていくことが必要」として、こども食堂などの地域の支援団体と、議員や行政諸機関、メディア関係など多様な地域主体の連携により直接的な支援や政策提言、課題の可視化をしていくことなどを呼びかけられました。



村井琢哉氏

講演②

「記者の眼から見た子どもの貧困問題 ＝実態と解決の糸口」

講師：中塚 久美子 氏 (朝日新聞大阪本社生活文化部記者)



中塚 久美子氏

約10年にわたり子どもの貧困問題を取材してきた経験から、世帯収入と子どもの教育状況や学力などの関係、ひとり親家庭の困難な現状などをデータを用いて示されました。また女性の低賃金は働くことが貧困解消に結びつかず、税の負担軽減が未婚親は適用除外になるなど様々な問題が根深くあり、お金の面での根本的解決が最も重要と述べられました。国では2013年に子どもの貧困対策法が施行され教育・就労・生活・経済支援の枠組みが出され、支援活動への応援基金設置や

実態把握なども始まりました。一方民間では地域での居場所づくりや給付支援を行う団体もあり、地域発のNPOの支援の取り組み事例を紹介されました。そして「これからも市民として、法成立後も対策がすすむように問題意識を持つこと、そして貧困を生み出すジェンダー不平等や賃金問題など構造上の問題に気付き、アクションしていくことが大事です」と話されました。

報告

「スクールソーシャルワーカーの役割と活動」

奈良県スクールソーシャルワーカー 谷 緑 氏

スクールソーシャルワーカー (SSW) とは、「子どもと、家庭や学校、地域など子どもをとりまく状況に働きかけて健やかな自立を支援する社会福祉の専門職」との説明があり、その活動内容を紹介されました。奈良県では十分に配置がすすんでいませんが、SSWは孤独にならない支援、つながりづくりという重要な役割を担っています。子どもの問題は人と環境との接点で発生するので、「見立て」が大切です。希望と自己肯定感を持ち困難を乗り越えることができる力をはぐくみ、そして切れ目のない支えで、次に支えられる大人へとつながるようにと願い活動されています。



谷 緑 氏

参加者の声より

〇いろんな機関がつながり、多様な場をつくる可能性があると感じられた。海外での取り組みの中にも参考になる様々な取り組みがある事を知ることができた。いろんな立場から子どもを中心につながり子どもにとって安心安全なエンパワーメントされる環境が広がっていくようになるよ。そのために子どもを支援しようとする者がお互いの姿が見えるよう、視野を広めていかなければいけないと感じた。

〇子どもの貧困が家庭の問題で解決できることではなく、日本の問題であることを知り、そのうえで何ができるか考えていく必要を改めて感じました。

〇子どもの貧困が問題とされてから、奈良県でもかなり多くの方がとりくまれてネットワークも立ち上がりました。地域とつながる。このキーワードでもっと進化していけばいいなと思いました。

〇安心、安全、人としてお互い尊重しあえる社会はしくみづくりが大変重要です。ソーシャルワーカーさんのような「つなぐ」役目を担っている方が多くなるよう支援したいです。

〇地域で人がつながりやすい場、居場所で考えていくことがまず必要かと思います。周囲のことを思いやりをもって関心を向けることが大切。谷さんのお話がその手引きかと思いました。

2018年度 奈良県生協連が取り組むこと

国連が2015年に提唱した持続可能な開発目標「SDGs」は、貧困・飢餓の撲滅、福祉の促進、資源、教育、ジェンダー平等など17ゴールを定め、協同組合もその推進の担い手として期待されています。そのような中、奈良県生協連は2018年度、高齢化や格差、食や消費生活の安全など私たちのくらしの様々な課題についてともに考え、平和でよりよい社会の実現に向けて、生協の仲間の連帯と、地域社会の皆様との連携により取り組みを強める一年にしていきたいと考えています。

重点課題

- (1) 協同組合の理念を広げ協同の心が息づく取り組みをすすめます
- (2) 諸団体と連携・協同し、安心して暮らせる地域共生社会づくりに参加します
- (3) 平和とよりよいくらしの実現のための社会的諸課題を学び考える場をつくります
- (4) 会員生協の交流と連帯をすすめます

(1) 協同組合の理念を広げ協同の心が息づく取り組み

◆協同組合間協同

- 連携により、協同組合理念を共有し地域社会に協同組合の存在価値を伝えます。
- 奈良県協同組合連絡協議会による第26回奈良県協同組合デーのつどいを開催します。

◆行政とのコミュニケーション

- 生協・行政協議会を開催し奈良県行政との意見交換を行います。
- 近畿地区生協府県連による行政合同会議や近畿農政局懇談会の他、行政の意見交換会に参加します。
- 自治体訪問を行い生協の取組みを紹介します。

◆災害復興支援と防災減災

- 福島子ども保養PJなど、奈良の地でできる被災地支援企画に参加します。
- 全国の生協の仲間と連携し「生協BCP」「相互協力のあり方と支援」「生協の災害対策」「防災・減災活動」「被災地支援活動」等について学習します。
- 県行政と大規模災害時の連携等についてコミュニケーションを図ります。

◆協同組合理念の学習

- 第29回生協大会を開催します。
- 会員役職員研修を実施し理念学習を行います。

(2) 安心して暮らせる地域共生社会づくりへの参加

◆消費者市民社会の形成に寄与する取り組み

- なら消費者ねっとと連携し消費者教育推進や消費者の権利保護活動を支援します。
- 消費者支援機構関西の活動に参画します。

◆住み慣れた地域で誰もが安心してくらすための協同

- 奈良県生活支援サービス・活動連絡会、奈良県社会福祉協議会と連携します。「奈良子ども食堂ネットワーク」に参加し、住民による活動団体の交流の場を応援します。また「フードバンク奈良」の活動に協力します。
- 健康づくり運動「健康チャレンジ」に取り組めます。

◆自然・くらし・エネルギーの地域共生

- 森・水・エネルギー・地域活性化を考える学習会や視察見学などを実施します。
- 県内の諸団体や健康・省エネ住宅促進の取り組み等への参加協力や情報交流を行い市民活動を応援します。

(3) 社会的諸課題を学び考える場づくり

- 食の安全懇談会を開催し、消費者をとりまく食品安全の現状を学びます。また食の安全に関するリスクコミュニケーションや学習会に積極的に参加します。
- ピースアクション in なら2018を開催し核兵器禁止条約の成果と今後の動向について考えます。「ヒパクシャ国際署名」に引き続き取り組みます。
- 大学生による平和活動に協力します。
- 被爆体験を聴く、語り継ぐ活動に協力します。奈良県在住の被爆者のつながりをサポートします。
- 憲法学習会を開催します。
- 農業問題、公共料金、社会保障と税等、くらしをとりまく諸問題について近隣諸団体との連携により会員への情報提供や学習を行います。

(4) 会員生協の交流と連帯

- 奈良県医療福祉生協の事業安定化と健康づくり運動を応援します。
- 大学生協学生委員と平和活動等で連携します。
- 生協組合員理事交流会を実施します。会員生協役員研修会を開催します。



奈良県生協連2017年度会員生協役職員研修会を開催しました

「21世紀の協同組合原則」

講師：栗本 昭氏（法政大学連帯社会インスティテュート教授）

2018年3月22日、奈良市内で奈良県生協連役職員研修会を開催しました。国際社会のなかでも協同組合の存在が注目され期待が高まる中、生協の一員として原点に立ち返り理念と原則を学ぶこととし、長年にわたり協同組合の活動や研究に携わってこられた法政大学連帯社会インスティテュート教授の栗本昭さんに講演をお願いしました。会員生協の役職員43人が参加し、改めて協同組合の基本的な価値に目を向け、これからの地域社会で取り組みを進めるうえでの確信を強める機会となりました。



栗本昭氏

【講演のポイント】

◆**危機の警鐘と価値と原則をめぐる検討**：80年代半ば、ヨーロッパの生協の破たんが相次ぎました。1980年のICA大会では協同組合は基本的価値を忘れ「思想の危機」に陥っていると警鐘が鳴らされました（レイドロー報告）。これを克服するには「組合員に帰れ」を基本に、参加、民主主義、正直、他人への配慮という協同組合の価値が大切であり（マルコス報告）、これを明確化するため、いわゆる「ロッチデール原則」の見直しの論議が始まりました。この検討論議の中では「班活動」など組合員参加を実践している日本の生協の活動が大いに注目され参考とされました。

◆**協同組合の定義と価値**：こうして1995年、協同組合とは何か、何を大切にするのか、いかに行動すべきかを1枚の紙にまとめた「協同組合のアイデンティティ声明」が採択されました。その「定義」では「事業を通じた」組織であり「人々」の組織であることが最大のポイントで、協同組合の本質をなしています。また、企業の「利益追求」やNPOなどの「公益の実現」とは異なり、組合員共通のニーズと願いを実現する「共益」組織であることが大きな特徴です。「価値」で示された「自助・自己責任」とは、慈善ではなく自分たちの力を集めてみんなですすけあうという相互扶助の考え方です。

◆**協同組合原則**：①自発的で開かれた組合員制 ②組合員による民主的管理 ③組合員の経済的参加 ④自治と自立 ⑤教育、研修、広報 ⑥協同組合間協同 ⑦地域社会への関与が、7つの原則として整理されました。新たに加わった第7原則は、「コミュニティ」をあえて「地域社会」と訳します。地域社会の持続可能な発展のために活動することであり、今日の国連の持続可能な開発目標SDGsの達成への貢献にも通じるものです。

◆**私たちは何をすべきか**：今後、協同組合は経済・社会、環境の持続可能性におけるリーダーであり、人々に最も好まれるモデルであり、最も成長する事業形態でありたいと願いますが、そのためには組合員の運営参加とガバナンスの改善に努め、事業の革新と協同組合間の連携を強化していくことが重要です。



参加者の感想

・世界でも日本の協同組合がとても大きいことにびっくりしました。認知度を高めていくことに力を入れていくことは大切。

・一つ一つの解説で、それぞれがどういうことか、よくわかりました。利用と運営は権利ではなく責任だと再認識しました。

おじゃましました //

～コープ自然派奈良の巻～

マグニチュード8.0の大地震が発生!

さあ、避難所での生活って?

HUG(避難所運営ゲーム)を体験しよう!

東日本大震災から7年。3.11を前に、防災の企画が3月8日にあるとお聞きし、コープ自然派奈良本部の組合員活動ルームにおじゃましました。

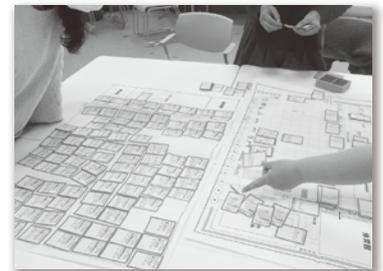
主催はコープ自然派奈良のみらい委員会。企画された理事の上市佳織さんから、静岡県が開発したとても面白いゲームであると紹介がありました。講師は組合員の沖本可奈さん。読み手1名と組合員さん5名が参加し、HUG(避難所運営ゲーム)を体験されました。



講師の沖本可奈さん

HUG(避難所運営ゲーム)は、避難所の運営を模擬体験するために静岡県が2007年(平成19年)に開発したゲーム。

H(避難所)、U(運営)、G(ゲーム)の頭文字を取ったもので、「HUG=抱きしめる」という、優しく受け入れるイメージと重ねて名付けられたそうです。ゲーム感覚で楽しく避難所運営を模擬体験できるのが特徴。カードと避難所の図面、掲示板を使い、読み上げ係1人と6人程度のプレイヤーから成るグループをいくつか作って行い、読み上げ係は、避難者の名前や性別、年齢、避難者が抱える事情などが書かれた避難者カードを、プレイヤーの対応能力をやや上回るペースで次々と読み上げ、プレイヤーは、そのカードを避難者の事情に配慮しながら体育館や教室の図面の上に配置していきます。出来事や空間配置を要求するカードが読み上げられ、プレイヤーは、どこを何に使うか等の空間配置を敷地図に記入して決めていきます。



自己紹介後、2つのグループに分かれ、約90分かけて、互いの考え方を話し合いながら、自由に意見を出し合い避難所運営について理解を深めていきました。次々に来る避難者(カード)に交じて、「トイレが山盛りになっている」「総理大臣が見舞いに来る」「炊き出し場を決めておいてください」などの指示が入ります。



想定

- ・ 3月8日(木)午前5時に大地震発生(M8.0)
- ・ 和歌山県沖30km(震源の深さは15km)
- ・ 現在時刻午前10時から午後5時の間(地震発生5~12時間後)
- ・ 午後から雨が降り続けている
- ・ 気温7度(夜間は0℃になる) ・ 強風
- ・ ライフラインの状況
電気:停電、ガス:遮断、水道:断水
電話:時々通じる、メール:遅れて届く

この「HUG」は、静岡県作業所連合会が手作りで製作し7,400円で販売されています。奈良県や生駒市、香芝市などの自治体でも貸し出しされています。意識づけに役に立ち、一度各自の自治会などで体験されるといいとお勧めがあり、参加者一同肯かれていました。いい体験をさせて頂きました。



ピースかふえ

「奈良県内の原爆被害者の取り組みと歩み ～2年間の被爆体験の掘り起こしの中で～」 報告会を開催しました

ピースアクションをすすめる会（奈良県生協連と9会員生協、ならコープ平和の会、withユニセフの会で構成）は2018年3月21日、県内原爆被害者の活動の伝承と記録の取り組みについて話を聴く「ピースかふえ」を奈良市内で開催しました。会場にはこの活動に関心を持った方々および県内在住の被爆者や2世の方など67人が集まりました。また県外からは、日本原水爆被害者団体協議会事務局の工藤雅子さん、ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の栗原淑江さんが参加されました。



報告者の入谷方直いりたにまさなおさんは広島出身で奈良市在住の仏像修理師（公益財団法人美術院国宝修理所技師）。2006年に解散した「奈良県原爆被害者の会」（わかくさの会）の歩みを追い、被爆体験手記一巻から三巻の復刻を目指して活動されています。

報告の中で入谷さんは、コツコツと個人活動で積み上げて来られたこれまでの資料掘り起こし作業の経緯と難しさについて説明されました。体験集ばかりでなく会の活動記録もほとんど残されていないのが現状で、記録が風化していくことが心配と話されました。最後に「奈良県内の被爆者の声を守れるのは奈良に住むわたしたちだけ。いにしえに学び、未来につなげる奈良らしい平和活動をすすめていきたい。」と協力を呼びかけられました。



報告する入谷方直さん

その後グループに分かれて「お話を聞いての感想」「次の世代につないでいくために私たちにできること」について交流しました。各グループでは「体験集第四巻の発行を目指したい。」「入谷さんの活動を支えていきたい。」「記録を持っている人を探したい。」など、新たな動きにつながる提案や意見も出されました。

参加者からは「よくぞここまで掘り起こして下さったと感激した。歴史を伝えていくことの大切さを改めて感じた。」「奈良にわかくさの会があったことも知らなかった。このわかくさの会を復活させ新しい命を吹き込む働きを自分自身少しでもできるようにしたい。」「まずは身近な父親（92歳）の記憶を聞き出そうと思った（東京での戦争の記憶）。」「戦争、被爆者の体験をもっと広めないといけないと感じた。今は平和ボケの時代で入谷さんの活動はとても大事で、後世に残していかなければと思う。」などの感想が寄せられました。



会場後方に設けられた展示コーナーには入谷さん自ら描いたイラスト画も。

「フードバンク奈良設立セミナー」が 開催されました



2017年12月に「フードバンク奈良」が設立されました。「まだ食べられるのに、廃棄される食品を、こども食堂や福祉施設、生活困窮者に届け、食品ロス削減に向けた意識を醸成し、地域コミュニティーづくりを支援する」ことが設立の目的です。設立記念のセミナーが、1月27日にぶろほの福祉ビル(奈良市)で開催され、市民や行政、こども食堂、生活支援団体、報道、生協関係者など、約100名が参加し、関心の高さがうかがえました。

会場には奈良市役所で職員向けに実施した「フードドライブ」の食材が141kg届き、当日も食材提供の受付が実施され、15kgの食材と米90kgも合わせてフードバンク奈良に贈呈されました。

渡辺一城代表(天理大学人間学部教授)が「福祉・環境、食に関わる様々な人々のネットワークで活動を始め、透明な運営を行う」と挨拶されました。奈良市からの贈呈式では、堀川育子福祉部長から目録が渡辺代表に手渡され、フードバンク奈良から奈良市に感謝状が贈られました。

その後、先駆的に活動されている「フードバンク関西」の浅葉めぐみ理事長が講演されました。国内での食品ロスの現状が紹介され、困窮する人にとってはすぐに食べられる食料の支援が効果的であることや、日本ではフードバンクに対する法的な支援制度がないことも指摘されました。熱心な質疑応答があり、持続可能な組織作りを期待する声も多くありました。来場されたこども食堂や生活支援団体や奈良市社会福祉協議会など登録された9団体に食料が渡されました。奈良県生協連もフードバンク奈良には役員として参画し、運営協力をしています。

その後も、行政や菓子製造企業、新聞販売店などからフードドライブ食品の寄付や申し出があり、支援先も次第に増え、配送やボランティアの受け入れなど、継続できる仕組みを構築していく事が課題です。



奈良市職員が行った
フードドライブの寄贈食材



会場の様子

奈良こども食堂ネットワーク情報交換会を開催

3月4日奈良県社会福祉総合センターにて奈良こども食堂ネットワーク主催の情報交換会が開催されました。2017年11月の奈良こども食堂ネットワークの総会后、会員の「こども食堂」向けに開催する初めてのイベントです。今までも準備会の時から交流会を2回開催してきましたが、話し足りないという意見を受け、世話人団体に話し合い、世話人団体の天理こども食堂の立石さんが進行役となってワールドカフェ形式で実施しました。テーマは「ボランティアさん仲間の集め方」や「運営の工夫」など全部で9つ。4人1つのグループで、カフェでおしゃべりするような気分でお茶やお菓子をいただきながら、席を順番にめぐりながら、いろいろな人と3時間たっぷり話し合いました。密度の濃い情報交換会になったことと思います。



ワールドカフェでの情報交換会



出された話を書き留めておきます

環境のページ



講演会「なぜ進まない？ 日本の再生可能エネルギー」

2月3日 ならまちセンター(奈良市)にて、講演会「なぜ進まない？日本の再生可能エネルギー」(主催：NPO法人サークルおてんとさん、共催：奈良県生協連)が開催され、75名の方が参加されました。県議会議員、奈良市や斑鳩町の職員、生協関係者、奈良県内だけでなく、京都や大阪のNPOの方も参加され、関心の高さがうかがえました。

安田陽教授(京都大学大学院経済学研究科)は、「なぜ世界中で再生可能エネルギーが促進されるのか？」についての理由として、「①費用便益比が大きい②外部コストが一番低い電源である」と述べられました。かけたコスト(費用)よりも市民へのベネフィット(便益)が大きいということです。また、外部コストはどの電源もゼロではないが、なるべく低いものを選択するべきであり、隠れた外部コスト(環境汚染や健康被害、温暖化対策費、放射性廃棄物処理費用などのコスト)をすべて出して、コスト(費用)とベネフィット(便益)を計算するべきだと指摘されました。電力会社の送電線の空き容量の調査結果から、民主的な運用(情報開示など)が必要であると強調されました。送電線の容量が「いっぱいではない」のに、「いっぱいである」理由が開示されずに、接続できないと拒否するのはおかしい。ベネフィット(将来世代への便益含めて)を考えれば、世界で再生可能エネルギーを使わない理由はなく、再生可能エネルギーに流れていくであろうとのことでした。日本は早く、このことに気づいて動くべきだと指摘されました。



会場はいっぱいになりました



質問に答える早川氏(左)と安田氏(右)

早川光俊先生(CASA専務理事、自然エネルギー市民の会事務局長)は、気候変動の国際交渉の経緯やCOP23の報告、世界企業が石炭火力への投資をやめ再エネに切り替わろうとしている状況を述べられました。世界はパリ協定に基づき、確実に脱炭素社会に向け舵を切り始めていると話されました。今年度中に決まる日本の石炭火力と原子力依存度の高い「エネルギー基本計画」には、国民はもっと関心を持って意見を言うべきだと呼びかけられました。会場からの質疑に、安田先生は、即座にデータ映像を使って回答されました。アンケートには、「進まない原因がある程度わかって良かった。どうすれば再エネ社会に変わるか、考えて行動することが大切だと感じた。」との感想が寄せられました。

自然エネルギー学校・なら2017

(主催：地域未来エネルギー奈良、共催：奈良県生協連)

2017年10月1日、10月29日と講座を重ねた自然エネルギー学校・なら2017は、第3回は12月1日～2日に田原本の木質ペレット製造工場、天川村薪ボイラーや東吉野のつくばね発電所、うだ夢創の里市民共同発電所への1泊2日研修を実施しました。1月20日に西粟倉村参事の上山隆さんのローカルベンチャーの取り組みの講義を開催し、全行程を終了しました。木質バイオマス利用に的を絞った講座でしたが、30名の方が入れ替わりながらも参加されました。天川村で温浴施設の運営に関わる谷林業の若き谷茂則さんともつながり、林業と木質バイオマスエネルギー利用との協働事業への展開につながりました。



天川村薪製造施設にて



天の川温泉施設の薪ボイラー

3.11を忘れない

みやぎ生協から
被災地・宮城のいまをお伝えします

職場で一緒に子育てができるから、 安心して赤ちゃんを産むことができた

2018年3月5日

震災で、沿岸部は人口減少が加速しました。気仙沼市では震災前年より人口が8572人減少し^(※)、少子化が一層深刻さを増しました。

「子どもの数が少ないので親同士がつながる機会も少ない。特に震災直後は母親が育児で孤立しがちだった」。そう話すのは、気仙沼市のNPO法人ピースジャムの代表、佐藤賢さんです。佐藤さんたちは震災発生翌日から乳幼児を持つ母親へ、ミルク・オムツなどを届ける活動を始めました。日々生きることで精一杯だった母親たちに変化が見えてきたのは、5月頃です。「夫が震災で離職した。自分が働きたいが働ける所がない」「子どもを預けないと働きに出られない」「将来、この子をどうやって育てていったらいいのだろう」といったように、子育てと就業に関する悩みが多くなりました」。母親たちの不安は地域の育児コミュニティが十分に整っていないことの証でした。

佐藤さんたちは「お母さんたちが一緒に子育てしながら働くことができるような場所をつくろう」と考え、公民館の一室をキッズルームにして、地場の野菜・果物を原料にしたジャム製造・販売事業に乗り出しました。翌年にはロンドンからの支援で知った子育て万能布ベビーモスリンの縫製も開始。さらに2014年にはジャム製造室と縫製室、キッズルームを備えた新工房を建設し、子連れで働ける環境を充実させました。働き方はゆるやかで勤務シフトは子育ての状況に合わせて自分で決めます。

ピースジャムでは7年間で15人の赤ちゃん誕生を祝いました。母親たちは、安心して産むことができた理由を、「ピースジャムには先輩ママもいれば初産のママもいて互いに頼りあえる。子どもの成長を職場のみんなで見守っていただけるから」と話すそうです。

「ピースジャムで働きたいと待機しているお母さんたちは20名ぐらいいるのですが、売上の規模が小さいので今は雇用を増やすことができません」と佐藤さんは言います。

復興支援を目的にした被災地の商品購入は年々少なくなっています。事業運営に厳しい状況が続くなか、佐藤さんは「ジャムもベビーモスリンもきちんと流通に乗せ、売上を増やしてお母さんたちの雇用拡大につなげたい」と意欲を見せます。

※2015年国勢調査



代表の佐藤賢(けん)さんと
スタッフの佐藤千由季(ちゆき)さん。



縫製室(手前)と調理室(奥の窓の向こう)のあいだに
キッズルームを設け、仕事をしながら子どもたちの様子
を見守ることができるようにしてあります。

©NPO 法人ピースジャム公式 HP <http://peace-jam.org/>

近畿農政局と近畿地区生協府県連協議会との意見交換会

第20回近畿農政局と近畿地区生協府県連協議会との意見交換会が2月27日に開催されました。開会にあたって京都府生協連上掛利博会長、近畿農政局新井毅局長のご挨拶があり、近畿農政局からの情報提供として「我が国の食料・農業・農村の動向と近畿農業について」新井局長から報告がありました。農業の成長産業化をめざした農業改革の背景、改革のめざしているもの、個別の政策の特徴などについての報告がありました。

その後、生協からの取り組み紹介として ①(兵庫)「子ども食堂を通じた共食の場づくり」(食育事例) ②(大阪)いずみエコロジーファームの取り組み」(農福連携事例) ③(京都)「大学生の食生活実態」(食育事例)が報告され意見交換を行いました。奈良県生協連からはこども食堂ネットワークとフードバンクの設立について、ならコープから事業系廃棄物削減の取り組みと子ども食堂・社会福祉法人への食材提供について報告されました。



奈良県消費生活審議会が開催されました

2018年2月22日、平成29年度奈良県消費生活審議会と消費者教育推進部会が開催され、辻専務理事が審議委員で出席しました。

審議会では、平成29年4月の消費生活条例の告示改正とその後の状況の説明がありました。この改正によりお断りステッカーを玄関などに貼っておくと、望まない訪問勧誘を予め断る意思表示になるので、悪質訪問販売の被害を防ぐことができるというものです。消費者にも事業者にも周知を強めるようにとの意見が出されました。この他、県内の相談状況や次年度の事業概要などについて報告があり、意見交換を行いました。

消費者教育推進部会でも次年度予定事業について詳しく説明があり、新規に予定されている高齢者特殊詐欺被害防止事業、金融機関連携高齢者等生活設計・悪質商法防止事業、中高大学生生活改善事業などについて期待する意見が出されました。

生活支援拠点施設(グループホーム等)建設支援チャリティー企画 マッケンジー・ソープ&国際絵画展

主催 こぶしの会 後援 奈良県生協連 他

障がいの重い人たちの地域生活を支える拠点施設(グループホームや相談支援センター)の開設をめざして、マッケンジー・ソープ&国際絵画展が2月24日～26日イオンモール大和郡山2階イオンホールで開催されました。マッケンジー・ソープ自身もディクレクシア(難読症)という学習障がいを持ちながら世界的に活躍されている画家です。希望・愛・喜びが込められた作品は見ている私たちに温かな気持ちにさせてくれました。また、障がいのある人たちの作品展示や授産品の販売もありました。



「障がい者応援クラブなないろはあと」さんのかわいい商品には心惹かれました。この絵画展を通して障がいへの理解と支援の輪が広がることを願っています。



なないろはあと
インテリアスティック

1月

- 11日 日本生協連関西地連大規模災害協議会
- 18日 第5回奈良県生協連理事会
- 23日 ピースアクションをすすめる会
- 25日 奈良県環境審議会水質部会
- 27日 フードバンク奈良設立記念セミナー
- 29日 地方消費者フォーラム
- 30日 なら消費者ねっと理事会
- 31日 組合員理事交流会実行委員会

2月

- 1日 日本生協連関西地連運営委員会・県連活動推進会議
- 3日 再エネ講演会(主催サークルおてんとさん、共催奈良県生協連)
- 9日 奈良県農業政策推進会議
- 14日 子どもシンポジウム(主催奈良ワイズメンズクラブ講演会、後援奈良県生協連)
- 17日 第28回奈良県生協大会
- 21日 こども食堂世話人団体会議
- 21日 健康と省エネ住宅県民会議
- 22日 平成29年度奈良県消費生活審議会
- 23日 なら消費者ねっと理事会
- 27日 近畿農政局と近畿地区生協府県連協議会との意見交換会
- 28日 組合員理事交流会実行委員会

3月

- 4日 奈良こども食堂ネットワーク情報交換会
- 5日 ピースアクションをすすめる会
- 9日 平成29年度関西災害時物資供給協議会総会
日本生協連あったか地域づくり交流会
- 12日 近畿地区生協府県連協議会
- 15日 大規模災害時の奈良県と生協の連携に関する懇談会
- 20日 奈良県農村活性化部会
なら消費者ねっと理事会
- 21日 ピースかふえ
- 22日 奈良県生協連理事会
2017年度役職員研修会

公告

奈良県生協連 第29期 通常総会開催について

当会 定款第49条にもとづき、奈良県生活協同組合連合会第29期通常総会を下記の通り、開催致します。

記

1. 日時 2018年6月23日(土) 10:00～12:30
2. 会場 奈良ロイヤルホテル 奈良市法華寺町254-1 TEL:0742-34-1131
3. 議案
第1号議案 2017年度事業報告・決算関係書類承認の件 第2号議案 2018年度事業計画及び予算案決定の件
第3号議案 役員選任の件 第4号議案 役員報酬決定の件
4. 代議員の選出について
会員規約第3条及び第4条にもとづき、代議員は、会員ごとに定める選出方法により選出し、会員生協の定数は3人とします。

編集後記

「春といえば花」？でもわたしには「春といえば草、春といえば虫、春といえば枝が茂る」です。季節がすすむにつれ沸き立つ虫の群れと生い茂る雑草、樹木との闘い。そうだ、今年は便利屋さんにもたのう！
(由)

今年も事務所の胡蝶蘭に花芽がついた。初めて入谷氏の報告会を行ったが、参加者からはその粘り強い取り組みに感動と協力の声が寄せられた。この取り組みも大きく花開くことを願う。
(和)

先日、2ついただいたレタスを、帰りのバスの中で出会ったご近所さんに1つ分けました。するとそのご近所さんから、最中をちようど取り寄せたからと箱でいただきました。まるでわらしべ長者のような話。人にプレゼントすると仕事の効率があがるというデータがあるとTVで見ましたが、ほんと？
(順)

毎年この季節になると桜の開花予想が出ます。しかし今年の春は突然のようにやってきて桜を「あっ！」という間に満開にしてしまいました。今日の帰り道車を川沿いにでも停めて桜を楽しんでみようかな。
(佳)